

この言葉(6)

言語による歴史認識とそれを文学的に表現する能力に裏付けられた政治的な理性

映画『コスタリカの奇跡』をめぐるアーサー・ビナードと小森陽一の対談「軍隊をすてた国コスタリカと憲法9条をもつ日本」の中の小森陽一の言葉である(「シネ・フロント」別冊38)。

1948年12月1日に軍隊廃止を宣言した「ドン・ペペ」ことホセ・フィゲーレス・フェレルがまずは文学者であり、その彼の文学者的あり方が、政治を文学的に表現したからこそ、その「文学的センス」がこの映画を通じても力を発揮し続けている、とする両者の共通認識に私は心を奪われた。

「政治を文学的に表現する」とはどういうことだろう。フィゲーレスは若いころマサチューセッツ工科大学に入学するため渡米するが独学の道を選び、ボストンやニューヨークの図書館にこもり、古代ギリシャからトルストイまで、ひたすら読書に没頭した。

映画の中で、コスタリカ大学教授であり2014年から大統領を務めているルイス・ソリスは次のように語っている。「フィゲーレスはとても知的で、独力で学問をしました。夜間にボストンやNYの図書館にこもり書物を読んだと、よく話していました。何時間も没頭したそうです。日中は労働者として働きました。お気に入りには米国の祖、ジェファーソンの言葉で、欧州の空想社会主義者シャルル・フーリエについても学びました。彼の思考のルーツは、そうした人々にあると思います。平和主義者の話もしていました。エマーソンやトルストイなどです。フィゲーレスは彼らの思想を実世界に生かそうとし、大きな影響をもたらしました。」

ナレーション:「フィゲーレスは当時を振り返り、言いました。『より完璧な世界を夢想し、心は燃え上がった』と。ウェルズ著『世界文化史体系』も読みました。最終章でウェルズは未来に言及しています。『未来には軍も失業者も存在しない。そして貧富の差も』」

帰国して集団農場を開設し、政治とは無縁な生活を送っていたフィゲーレスが突然、政治の世界で発言し始めたのは、このように長年にわたる読書と学問によって、文学的素養、歴史感覚が培われていたからに他ならない。つまり、彼は政治を政治的言語ではなく、文学的言語で表現する力を持っていた。しかも、政治的な現実感覚にも優れていたのだ。

私がこの映画を観て最初に感じたことは、フィゲーレスと彼に続くコスタリカ政府が困難に陥った時にくださった政策決定が常に「現実的」である、ということだった。

第二次大戦中、国内で暴動が起こったとき、フィゲーレスはラジオを通じて政府批判を行いメキシコに追放される。メキシコでカリブ軍団を知り、彼らと協定を結んだフィゲーレスは7人の男たちと農場に集結し、武力革命を始める。カリブ軍団は密かにフィゲーレスに合流して攻撃態勢を取り、5週間の戦いの末、カルデロン・グアルディア大統領率いる政府を倒し、カルデロンはニカラグアに亡命する。このあたりの詳細はよく分からないのだが、4

千人以上が死亡したこの戦闘を戦い抜き、勝利に導いたフィゲールスの現実的政治手腕は大したものといえよう。

1948年12月1日の式典で、フィゲールスはハンマーを担ぎ、国軍の要塞の壁に勢いよく振り下ろした。フィゲールスの歴史的な演説が映画ではアニメーションで再現される。

「コスタリカの常備軍、すなわちかつての国民解放軍は、この要塞の鍵を学校に手渡す。今日からここは文化の中心だ。第二共和国統治評議会はここに国軍を解散する。わが国の安全は警察によって十分に守られているからだ。我々は新しいアメリカ大陸の理想でありつづける。ワシントンやリンカーン、ボリバルやマルティ、コスタリカは彼らの理想を体現する国となろう。アメリカよ!諸国の子どもたちも、かけがえのない存在なのだ。小国コスタリカは今、とこしえに誓う。心から文明と民主主義を愛してゆくことを。」

1948年に常備軍廃止を憲法で制定したコスタリカはその直後、二度の危機に見舞われている。ニカラグアに亡命したカルデロンがフィゲールス転覆の機会をうかがい、1949年と1955年にニカラグアの独裁者ソモサの支援の下、コスタリカに戦争を仕掛けた。

ソリス:「フィゲールスは民兵を誘導するのがうまく、ニカラグアからの攻撃を2度とも撃退しました。そしてアメリカ大陸で初めて、1947年に締結された米州相互援助条約を発動させた大統領となりました。一国が外国から攻撃されたらアメリカ大陸の諸国が助ける、集団安全保障条約です。」

ナレーション:「理想と現実を見つめつつ、フィゲールスは文明的社会を目指します。政府予算を文化事業に使い、批判されると彼はこう答えました。『楽器もせず、耕してばかりはダメだ。』」

次にコスタリカが岐路に立たされるのはコスタリカの国境地帯でニカラグア軍が戦闘を始めた1980年代のことである。ニカラグアでソモサ政権が倒され、サンディニスタ民族解放戦線の兵士たちが入城する中、アメリカは彼らに対抗して反革命勢力コントラを支持し、コントラを北進させるためにコスタリカに基地を置きたがった。時の大統領レーガンは革命が成立すれば、中米が共産主義の基地になり、北米も毒される、と強硬策に訴えた。

この状況下で苦悩の末に当時のコスタリカ大統領モンヘがとった策は中立性宣言だった。

ソリス:「対米関係を壊さず、うまく距離を取りました。モンヘは当時の中米でレーガン政権と最も密な関係を築きました。これができたのは大胆な政策で米国の方針と距離を取ったからです。」

ナレーション:「1983年、米国の圧力に対抗するためモンヘは渡欧、各国首脳にコスタリカ支援を訴えました。帰国後、彼は正式な舞台上でコスタリカの中立を宣言、平和が『精神的な武器』だと述べました。カトリック教会と世界各国がこの宣言を歓迎。コスタリカ世論も83パーセントがこれを支持しました。」

ニカラグアでは民族解放戦線が勝利したものの、この時点でアメリカの要求に従っていたならば、現在のコスタリカは存在せず、米軍基地が立ち並ぶ国に変貌していただろう。こ

の決断も私を驚かせた「現実的」な決断だった。

1986年の選挙で、争点となったのは「非武装を継続するのか？ 国境の向こうから火の粉が降っても？」という、これもまた大変現実的な問題だった。米国寄りの対立候補に勝利したのは、米国が推す軍事路線に断固反対したオスカル・アリアスで、これは、軍事化を許さない国民の勝利だったといえる。

ナレーション：「米国の軍事的圧力が高まるなか、恒久平和国家でいられるかは、アリアス大統領次第でした。」

1986年12月、ホワイトハウスに呼ばれたアリアスはレーガンと初会談した。

アリアス：「以降、9か月、私は4、5回、彼を訪ねましたが、話題はニカラグア一色でした。彼は、コントラを自由の闘士だと称えます。『コントラは解決策ではなく問題だ』と私は言いつづけました。」

その後、ヨーロッパ各地の首脳を訪ね、コスタリカの外交支援を訴え続けたアリアスは法王からサッチャー首相にも面会して「何百万という中米人の命が私たちにかかっている。何としても失敗できない」と訴え続け、和平合意に至り、ノーベル平和賞を受賞する。一国の大統領が自国民のみならず、中米の人々の命を背に、大国からの圧力に屈することなく行脚にも近い努力を重ねた姿を思うとき、これはもはや小国だから成しえた、とか発展途上国だから成しえたという類の「異見」を跳ね返すだけの普遍的な力を持つ出来事だと思えない。

最後の驚きは、若きロースクール生が成し遂げた「奇跡」だ。2003年、アメリカはイラク戦争にコスタリカを巻き込もうとした。当時のコスタリカ大統領パチェコは有志連合への参加を決める。フレンズ・ピース・センターのジーンの言葉。

「パチェコ大統領は当時、実はイラク戦争にはとても消極的でした。当時の在米コスタリカ大使が大統領に強く勧めたのです。『国益のために参加しなければならない。とにかく参加すべきだ』と。1982年からコスタリカは中立国ですから、国民は猛反対しました。」

この時、大統領に対する訴状の原告となったのが当時ロースクール生だったロベルト・サモラである。

「2003年当時、大統領だったパチェコはイラク攻撃に公に賛同しました。これには世論も大きく拒絶の意を示しました。99パーセントの国民が反対だったのです。私は当時ロースクール生で、友人が言いました。『法を学ぶ者として何かすべきだよ。』私が『訴えよう』と言うと、皆に反対されました。」

訴状を書いて提出すると、受理された。

ナレーション：「たかが学生のサモラが勝訴しました。国が有志連合からの離脱を命じられたのです。最高裁はイラク侵略支援が、コスタリカ憲法と平和的伝統に反するとの判決を下しました。」

この「奇跡」の背景にあるのは、平和国家、中立国家としての誇るべき歴史、そしてそれを支えている国民の意識の高さと勇気である。主権者は国民であることの確固たる証明で

ある。私たち日本人もこの「奇跡」を起こすことができるはずだ。

2010年にニカラグア軍がコスタリカ領の島を占拠した時も、コスタリカはハーグの国際司法裁判所に訴え、それが事態の収拾に効を奏した。現在、弁護士として活躍するかつてのロースクール生は発言する。

「ニカラグアが侵入したときも、法を信じる我々は法に訴えました。結果は国際法の大勝利であるだけでなく、国際政策、自衛政策としての平和の大勝利でした。1弾たりとも発砲されることなく、国際的な紛争が実戦なくして解決したのです。」

映画では、現在コスタリカが抱えている問題、格差の拡大、貧困層の増大、不平等、政治家の汚職、自治に対する脅威、麻薬戦争などが映像とともに語られる。2005年、アメリカが中米自由貿易協定に署名し、コスタリカでの国民投票で小差ながら参加が決定し、「社会的民主主義により築いた福祉国家が自由貿易というネオコンに解体されつつある」という。グローバル化のせいで今や多国籍企業が乱立し、国民の生活、平和、幸せが奪われつつある。しかし、外交と国際法を盾に未来を目指すコスタリカ国民が、誇りあるコスタリカ国民として生きる道が閉ざされているとは思えない。

フィゲレスの娘クリスティアーナは国連の気候変動責任者に就任し、次のように発言した。

「父の背中を追っている気がします。私が遺伝子として受け継いだのは国際法への基本的な信頼のようなものです。父が軍隊を禁じることができたのは国際法への信頼があったからです。『有事には国際法が助けてくれる』と。私は気候変動の分野で国際法に身をささげています。すべての国が手に手を取り合って協力し、人類が招いた危機から脱出することができるように。」

弁護士サモラの言葉。

「正義は戦争より強いと信じます。そして法的手段は武器よりも強いのです。国際法を信じることは他国の敬意を信じること。この面でコスタリカはとても先進的です。」

無名に近かったコスタリカ大学教授ソリスが2014年の大統領選で勝利を果たした。

「私たちの歴史が明確に語っています。社会正義こそ発展の基盤です。国民全員が今、決意しました。『永遠に責任感のある包括的で平等な国。そんなコスタリカを築こう』と。人を大切に、すべての人のための政治を行います。そしてこの土地とともにコスタリカの未来を育てていきましょう。希望あるコスタリカ、幸せなコスタリカ。21世紀に我々が生きる新しい国、新しいコスタリカを！」

彼の言葉を支えているのは、ほかならぬ国民であること、それが最も重要なことである。

(扇千恵 記す)